

# 「見た目」時代における 私の風景体験の価値の自己了解について

佐々木 葉

フェロー会員 博士（工学） 早稲田大学創造理工学部社会環境工学科  
〒169-8555 東京都新宿区大久保3-4-1, E-mail:yoh@waseda.jp

風景や景観を「見た目」と呼ばないでほしい。その理由を説明することは、主体と客体の問題を考えることであり、風景論、風土論の根源的な課題である。ベルクや中村良夫の論を参照しながら、「見た目」に傾倒する現代を生きる私たちが、あやふやな私の風景体験を大切であると自己了解していくことの意味を考える。

キーワード: 風景体験, 風景論, 風土論, 見た目, 主体と客体

## 1. 2018年夏

2018年の夏はとても暑かった。昼下がり、築50年を超える母屋の畳に寝転び、本を読むうちにうつらうつらする。庭の椿がゆらゆらと揺れ、光がきらきらとゆらめく。ああ、この景色を眺めながら死んでいきたい、と思う。

2018年の夏は深夜も暑かった。午前零時半に新宿駅で待ち合わせ、4名のグループで千駄ヶ谷の東京体育館から神宮外苑、代々木をめぐり新宿まで歩いた。ARCHが主催する東京ストリートカウントに参加し、ホームレスの数と居場所を調査した<sup>1)</sup>。彼らの存在と不在は、昼間の都市のオープンスペースの見え方を一新させた。無防備に横たわるに適した環境の質とその行為への寛容、不寛容、管理の縄張り。ホームレス問題そのものにとどまらず、都市の公共空間問題が、少しだけ自分ごとに引き寄せられた。

2018年の夏にいたるまでのゼミでの議論。卒論のテーマを模索する学部4年生の言葉を聞きながら、景観という概念の硬さとその操作のための要因解明欲求の強さに度々とまどう。景観問題への関心が解決策というどこかにある正解の探索に直結する。その直接的で近代的な構えはゼミに限らず随所で感じることである。

以上のような2018年の夏の感触を背景として、このエッセイでは、「私の一つ一つの体験としての風景の価値の自己了解」について考えてみたい。そのため、まず現代のヴィジュアルへのまなざしを確認し、主体と客体の区分から生まれた風景とその近代的特質の超克論の過程を極めて簡略に確認し、現代の風景体験への構えを書き留めるという手順で進むこととする。

## 2. 「見た目」へのまなざし

景観や風景が「見た目」として理解されているような危惧を感じるものがしばしばある。インスタ映えという語は社会的価値をすでに有している。そこにはいささかの批判や諦めもしくは割り切りも内包されている。

さて著者は、学部2年生の景観工学の授業の初回に、ウォーミングアップとして景観に近い言葉を複数並べ、それらの語感の違いを考えてもらうことをここ数年行っている。風景、景観、眺め、光景、シーン、見た目。これらの語を使った例文を作成してもらうとそれぞれの違いが浮かび上がってくる。その結果はいつかきちんと分析してみたいが、およその特徴としては、景観は行政的な、眺めは高い視点から、光景には悲惨なといったネガティブな形容詞が、シーンは映画の、といった連想が伴いやすい。風景はやや曖昧だが自然と関連傾向が見られる。そして見た目については、中身や実際との対照性、またその対照は不一致やズレ、意外性が暗黙のうちに想定されている。例文としては「人を見目で判断してはいけない」、「料理が得意と言っていた友達が作った料理の見た目は良いが味はまずい」などである。つまり「見た目」は中身や実際とは切り離されたものである、ということだ。その上で現代のインスタ映えを含め「見た目」への傾倒を読み解いてみる。

まずは中身や実際に踏み込むこと（によって生じるリスク）を回避したコミュニケーションのためのツールとしての「見た目」の重視、である。本当は、内面は、といったことまで知る、理解することを意識的あるいは無意識的に回避したコミュニケーションをとるためには

「見た目」は非常に有効な媒体である。自他ともにそれ以上は介入しません、知りません、という了解のもとでの関係性の構築ツールとして「見た目」は有効である。

次に、「見た目」をきっかけにして中身に入っていくという手法のための対象としての重要性がある。「見た目」を綺麗にすることで自信が付き、性格は前向きになりやる気も上がる、といったロジックに基づく。広告宣伝も同様で、まずは人の目に留まって知ってもらうことが重要で、そこから中身に關心を持ってもらう、そうした手法からの「見た目」の工夫がある。

最後には、「見た目」の集積からある中身を浮かび上がらせる手法に用いるデータとしての關心がある。個々の見た目と中身、その1対1対応では読みきれない関係性や中身を、対象の数を増やすことによってなんとなく抽出、あるいは読み取る。Degree Confluence Projectや写真家北野謙による作品our faceは、一枚一枚の写真ではなく、その集積によって浮かび上がる世界の特質を表現した。一枚の写真、つまり視点と瞬間が固定された画像を集積することで空間と時間の揺らぎを内包し、知覚の解像度を変えることで浮かび上がらせる新たな画像とは、対象（客体）に対する自己（主体）のまなざしを柔軟にしてみた姿、を想起させる。しかし今では簡単に平均顔を作るアプリ、大量の写真から一枚の画像をつくるアプリが登場して、見た目の加工による新たな見た目づくりのテクニックにもなっている。

以上のような3つのまなざしが、「見た目」が人々の重要な関心事になっている現状から浮かびあがる。

### 3. 風景論における主体と客体および風土

#### (1) ベルクの風景・風土論

「見た目」傾倒の現代に至るまでに、風景はどのような形で論じられてきたのか。非常におおまかな振り返りをするために、オギュスタン・ベルクの論をみていこう。風景とは発見されるもので初めからそこにあるものではなく、西欧では都市住民が田園を風景として愛で、風景画が描かれる16世紀ごろに発見され、それは近代的主体の確立と共にあったという風景論の定説から、ベルク自身がテーマとする近代パラダイムの超克としての風景知および風土論を振り返る。そののちに中村良夫先生による風土自治論のなかで位置付けられる風景（と風物）についても確認する。

ベルクの「空間の日本文化」<sup>2)</sup> (1985) は修士の学生であったときに出版された。その衝撃以来ベルクの日本語の単著を追いかけてきた。「風土の日本」<sup>3)</sup> (1989) でいささか戸惑うも直後の「日本の風景・西欧の景観」

<sup>4)</sup> (1990) で未来への希望を授けられ、しかしその後の風土論への展開が進むについて難解となり、読了しないもの<sup>5)</sup>が増え、最新の「風景という知」<sup>6)</sup> (2011) においてベルクの問題意識を再び確認するという読書遍歴であった。今回改めて数冊を再読し、ベルクが展開してきた風景論をめぐる課題について私なりの理解を以下にまとめる。

まず発見されるものとしての風景というテーマがある。環境の視覚像イコール風景ではない、という意味において、誰がいつどのような風景を発見してきたか、あるいは風景は誕生したかが論じられる。ベルク自身が示す風景の誕生判断基準は当初4つであったものが徐々に増えて「風景の知」では7つが示されている。つまり文学、地名、庭園、建築、絵画、言葉、評論の出現に注目して、ある社会における風景の存在を判断するのである(文献6)p.50)。これに照らせば風景の誕生は西欧では16世紀、中国では5世紀、日本では平安時代となる。西欧での風景の発見が都市住民による農村、田園の風景の発見であったように、近代的な風景の誕生は環境を客体化して捉える主体の誕生を意味した。これは西欧において20世紀まで君臨した主客二元論という近代パラダイムに基づく。その「近パラ」<sup>1)</sup>の行き詰まりの打開を非西欧社会にベルクは求めている。そして主客の関係が西欧のそれとは異なる形のもので5世紀の中国に、また日本においても中世以降に存在していた風景を論じることで、その手がかりを得ようとする。つまりベルクにおいて風景論は、主体と客体の関係問題を論じるモチーフであると理解できる。

西欧の「近パラ」を輸入することで日本にも明治時代以降主客分離された風景が、従前にあった揺らぎをもった多視点的主体と客体の関係によって生成する風景を変質させていくものの、下地の風景は完全には失せない。こうした重層した意味をもつ日本の風景を論じていくなかで、眺めとしての風景ではなく、風土という概念が導入される。和辻哲郎の「風土」<sup>7)</sup>を引きつつ、風土を状態やものというスタティックなものとしてではなく、関係性というダイナミズムとして捉え、「風土の日本」(1988)でスケッチした風土をめぐる論考を「風土学序説」<sup>8)</sup> (2002) によって大成させ、そこから再び「風景という知」(2011)として風景による世界の再生<sup>9)</sup>を呼びかける。そこでは風景知といういわば文化的景観や篠原の「なる風景」<sup>8)</sup>を形成する知と、風景自体をあれこれ論じる風景についての知という対照的な知を示している。

上記はベルクの時系列での各著作を十分に理解したうえで概説ではない。正直なところ、ベルクの言っていることの過半は理解できない。哲学、言語学、記号論等の基礎知識が不足しているためだ。よってほとんどのコンテンツをブラックボックスにいられたまま、ベルクが論

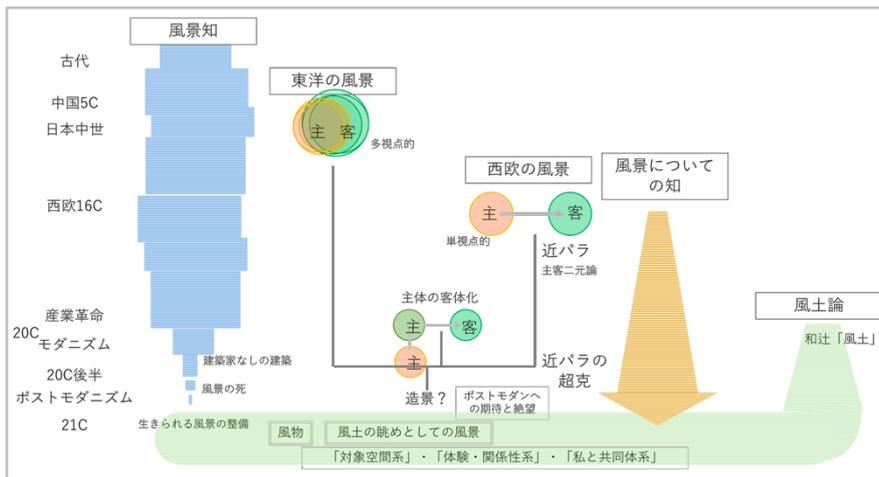


図-1 ベルクによる風景論・風土論のノート

じてきた風景と風土についての私なりの見取り図をノートした(図-1)。この図は風景や景観を議論するときの背景の理解として見ることもできる。

## (2) 風土論の3つの系

では次に、図-1の一番下段に位置する風土論をベースとした風景について、整理しておこう。とは言うものの、ベルクの風土論の集大成とされる「風土学序説」は分からないことだらけである。ベルクをすべて理解しなければ先に進めないと諦めず、思い切ってこの難書を位置付けてしまっただけで進む。つまり、風土論は、「対象空間系」・「体験・関係性系」・「私と共同体系」の3つで構成されている、という理解である。「風土学序説」を構成する、第1部「〈そこにある〉の〈そこ〉」、第2部「物の人間化」、第3部「他者ととともに実存すること」を読み替えたものである。それぞれのキーワードをメモする形でなんとなくイメージするという理解でよしとし(表-1)、大切なのは、このアプローチであり対象である3つの系からなる土俵で、風土論および風景論は展

表-1 ベルクによる風土論の体系

	対象空間系	体験・関係性系	私と共同体系
の章 「風土学序説」	[そこにある]の[そこ] ・場所 ・世界 ・宇宙	物の人間化 ・封土=動性 (ムーヴアンス) ・意味=おもむき ・手掛かり	他者ととともに実存すること ・焦点 ・市民体(シテ)
キーワード	場所/空間/トポス 地形/地理/構造 世界観/コスモロジー スケール ユークリッド空間/量子空間	生きられた象徴/メタファー リアリティ 生活/技術(狭義の)和社の風土言語 主語と述語 動機/モチーフ アフォーダンス 風景の誕生	個人/近代的自我 身体性 世間/社会 クローン 共同体/コミュニティ イ 風物身体 他者 エコロジー 建築/都市

開していくのだ、ということを確認する。

## (3) 風土と風景論のフロンティア

人を取りまく環境の眺めである風景とは、環境を客体として主体がそれを主に視覚によって捉える現象であるから、主体と客体によってモデル化される。「近バラ」の超克を正面に据えなくとも、この主客二元論では捉えきれない風景体験の価値と意義を論じるための風景論は常に模索されてきた<sup>8)</sup>。

さらには、具体的地域の計画やデザインへのコミットメントこそが関心ごとである我々にとって、ベルクの風土論、風景論は直接的な武器にはならない。そこでベルクから離れ、中村良夫先生による風土と風景を参照する。

まず「風景とローカルカバナンス」に収録された論考の結論的な部分で、以下のように風景における主体と客体が論じられている<sup>9)</sup>。

「周囲の眺めを記述するにあたって、触覚、聴覚、味覚などの身体感覚に由来する曖昧な感覚を排除し、世界を客体化する視覚に特権を与えることで成立するlandshaftなる概念が西欧で現れた」(p.59)。これが「客体としての「絵になる景観」を生み出したことへの一定の評価を示しながらも、結局は「目玉だけになった私たちの身体は、青白い孤独の中で、痩せ細り、その知性は、かなり窮屈になったのではないだろうか」(p.60)という。こうした状況を打開するための風景とは、以下のように記される(p.61)。

風景は主体と客体の間に浮かぶ、と要約できる。

風景は個人と社会の間に浮かぶ。

風景は主体、客体、社会の縁を結ぶ触媒である。

つまり風景は、眺めと呼びうる姿形、いわんや見た目と

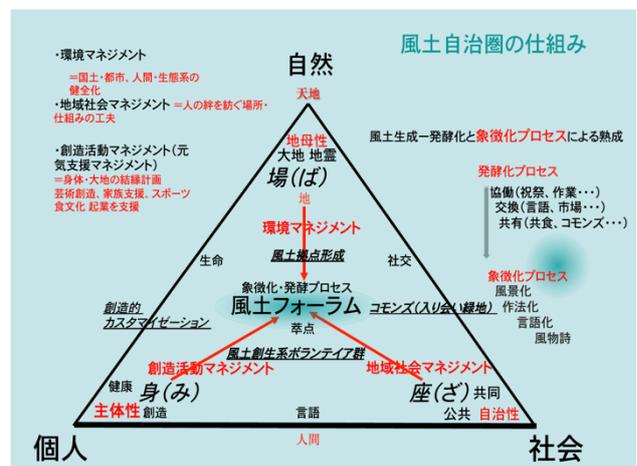


図-2 中村による「風土生成三元モデル」<sup>11)</sup>

してだけでは捉えられないのである。それゆえに風景をデザインしていくという行為の範疇も広がっていく。

これは明らかに「近パラ」世界のなかで操作的景観論としてスタートした景観工学の超克である。人をとりまく環境の質の向上、あるいは破壊からの防護をミッションとしてスタートした際には、客体である環境をその総合指標である景観というモードから操作することが目指された<sup>4)</sup>。そのアプローチと手法は一定の成果をあげたものの、眺めおよび操作の概念の拡大へは模索されつづけた。そして現在、中村先生の手によって、多元的な概念かつ手法による風土自治圏の仕組みモデルとして構築されている(図-2)<sup>11)</sup>。

この図のなかで風景という文字は、象徴化プロセスの一手法である「風景化」として現れるのみである。この図を含む論説など<sup>12)</sup>から風土論における風景をノートしよう。風景とは風土の揺らぎを含む個人的体験の中で目に焼きついた印象である。そもそも風土というのは厳然とそこにある単純な客体としての環境ではないから、そう簡単にこれですと指摘できない。しかし風土は地形と生活(つまり空間と時間)に根付いたものであるからその体験にはある特徴があり、体験の仕方(つまり人と時=場所)によって揺らぎはするが、「ああこの感じ」とその人、その都度ごとに捉えられた風景=眺めによって実感される。その一人一人の風景は揺らぎながらも共有される。そういった風景体験を産みだす母胎が風土である。こうした風土の眺めとは、パノラミックな、あるいは構図的ゲシュタルトを有した風景としてとらえられるとも限らない曖昧なものである。風景をぐっと手元に引き寄せた断片である風物によって「ああこの感じ」を実感する。そういう方法で人々はもっと楽しく気楽に風土と付き合うことができる。

以上が、中村先生の風物を含む風景体験による風土をマネジメントしていく方法論(の一部)であると考えられる。図-1には「風物」と「風土の眺めとしての風景」を書き込んだ。風景論のフロンティアは、およそ以上のように描画できるのである。

#### 4. 現代の風景体験への構え

ではそろそろ冒頭の問題意識にもどろう。まず2章で述べた「見在目」時代における風景の意味と価値について考える。

前章で見たように、現在風景論は、主客二元論の上に立つ視覚像であることをいかに超克するか、としてある。主客二元論の上に立つ視覚像は、最も「見在目」に近い風景である。これをいかに超えるかが課題である現在、

その超えるべき対象である「見在目」への傾倒が進む。その流れを止めよというのではなく、そうした時代における風景の意味と価値を確認したい。

まず2章で3つ目として挙げた「見在目」の集積からある中身を浮かび上がらせることとは、客体のビッグデータ化であるといえる。ビッグデータとほぼセットとなりつつあるAIによって、今まで見えなかった様々な中身が見えるようになるだろう。極めて精度の高い国土数値情報が東京の微地形の有機的な構造に見える化した時の衝撃は忘れられない。夜間の地球の衛星画像、ストリートビューを用いた世界の街路の緑量の分析<sup>13)</sup>。こうした発見は今後も続く。そしてその結果は風景についての知として、風土の3つの系のいずれにも組み込まれていくであろう。しかし、それを風景体験にフィードバックし、風景知の実践へとつなげていくには、主体の頭と身体での問題意識化が必要である。この意識化のプロセスを楽しめる形としてデザインすることにプラタモリは成功し、石川はもう少しマニアックかつ重層的に表現している<sup>14)</sup>。

いずれも見えづらい客体から何かを読み取りたいという主体の好奇心と愛情が新しい風景についての知を自分ごとに引き寄せ、共有していく鍵となる。社会の課題を自分ごとに引き寄せる方法は、風景を媒介としないものも数多くあるが、一枚のビジュアルが世界観を変える力を持ってきたことは、歴史上にも多々ある<sup>5)</sup>。

次いで見在目から入って中身を変えることについては、先述したように景観工学がたどった道に照らせば、ある程度の成果はあっても限界があることになる。見目の獲得がテクノロジーとマーケットによって一層容易になっていくにつれ、見目とそれを通じて獲得したい身体(中身)との連続性が薄れる。そこで気がかりなのは、現代の風物は風景の「見在目」であるという図式である。季節感の象徴となる食事や衣服、しつらえは確かに風物であるが、風土の中で育まれた風景の断片として成熟するプロセスを捨象して、記号化された季節感自体のサインとして提供される風物とその消費は、中身である風景、風土への気づきや参加へと開花する確率を下げ、ときに開花させること自体を拒むであろう。主体が客体の物理的な加工プロセスにどれほど参加するかが鍵となる<sup>6)</sup>。

そして中身に踏み込むことを回避したコミュニケーションツールとしての見在目については、そうしたツールを使う主体の客体化が生じている点に注目したい。客体の見目が重要であるということは、自分が他者にとっての客体としてどう見えるかのマネジメントの重要性を意味する。そのための技や苦労はデジタルツールによってどんどん高度化している。アカウントの使い分けはいまや常識という<sup>7)</sup>。「目玉だけになった私たちの身体は、青白い孤独の中で、痩せ細り、その知性は、かなり

窮屈になったのではないだろうか」という中村先生の指摘は、主体が気づかないまま現在も進行中である。客体化された主体は、さらに客体化されていくという合わせ鏡のような無限のメタ認識のなかに、出発点である生身の主体がいつの間にか溶解していく。その不安から逃れるには目の前の鏡を叩き割る勇气が必要である。鏡が砕けたところで主体は壊れはしない。眼前には何の変哲もない、しかし光も風も匂いもある多分ちょっと懐かしい眺めが広がっているはずだ。主体は「見た目」という眺めが保障する存在ではなく、ありふれた環境という客体のなかを呼吸しながら行き来している存在であることに変わりはない。

最後に、畳に寝転びながら「ああ、」と思った私のこの夏の風景体験の価値を自己了解したい。庭の椿は客体でありながら私と共にある。光がゆらゆらとし、畳の感触と夏の空気は、いまこの場かぎり、という風景のオーラを伴っていた<sup>10)</sup>。こうしたなんらの公共性も共有可能性も生産性もないこの一時の風景体験は、私にとってはかけがえのないものである。そう自己了解できる<sup>11)</sup>。

こうした自己了解できるという感覚へのリスペクトは、他者のその感覚へのリスペクトを可能とする。ここ数年通い詰めている長野県宮田村で江戸時代の蔵の取り壊しの話が持ち上がった。棟札もあり、構造的な特徴もある歴史的な資源である。建築史の専門家による調査に同行しながら手持ち無沙汰な私は、主人のおばあさんと一緒に母屋の縁側に座ってお茶を飲みながら、庭木越しにその蔵をぼんやり眺めていた。そして、ああ、このぼんやり眺めている感じこそが持ち主が失いたくない価値なんだなあ、と体得した。そして蔵を文化財としての価値とは別の枠組みで考えていこうと決断した。このような仕事の仕方は実に効率が悪い。一步一步である。しかも頼りない。ただ風景というものを仕事としている私にとって、その根源的な意味は、庭の椿の私個人の風景体験の価値に根ざしている。その自己了解は、風景であるが故の仕事の仕方の自己了解に繋がる。

**謝辞：**日頃の何気ない会話の中で本稿への重要なヒントをいただいた友人たちに感謝する。

#### 補注：

- (1) 「西洋近代の古典的パラダイム」を「近パラ」と略記するとし、(文献6)p.40)、これがキーコンセプトであることを表している。「近パラ」が風景の死を惹き起こす理由、それゆえに「近パラ」の超克が必要な理由は、pp.83-86を、また超克のあり方に対する批判はpp.90-91、さらに超克のように見えるが「近パラ」の延長である考え方と風土論との違いはp.97参照。
- (2) 文献6)p.10の「なぜもはや風景知を働かせられないのか、したがって国土全体のスケールで、本当に生きられる風景を整備することができないのか」という問題提示である。

- (3) そもそも中村先生の処女作「土木空間の造形」<sup>10)</sup>は記号論による風景読解と創造による近代的空間の超克を目指したものであった。
- (4) 景観研究自体は、客体である環境を要素に分解して個別に扱おうとする典型的「近パラ」を超えようとしたものであったが、工学分野にあってそれは「近パラ」的研究に流された、あるいは誤解されたとも言える。
- (5) ビューリッツァー賞や、網野善彦の「日本海は大きな内海だった」の図<sup>10)</sup>など。しかし時に一枚の画像には、やらせといった操作と批判が繰り返されるのも常である。
- (6) モノ消費からコト消費への流れには、一定の期待が持てるが、良くできたプログラムによって知った気になるというリスクもある。
- (7) そうした若者のリアルを悲観的にならずに描く朝井リョウの作品は実に興味深い。例えば文献16)など。また若者のコミュニケーションの形については文献17) などがある。
- (8) こうした私の風景体験についてはこれまででも考えてきた。前稿<sup>10)</sup>では地域の景観の共有という計画論的な文脈上で考えていたが、本稿ではより生身の人間にとっての風景体験にシフトしている。なお、こうした生きるといふことにおける風景の意味については、山田・西がより深く、具体的な論を展開している<sup>20)</sup>。

#### 参考文献：

- 1) 北畠拓也・河西奈緒・杉田早苗・土肥真人：社会課題を解決する舞台となる公共空間—市民参加型の深夜ホームレス実態調査から、建築雑誌Vol.133, No.1711, pp.20-21, 2018.5
- 2) オギュスタン・ベルク：空間の日本文化、筑摩書房、1985
- 3) オギュスタン・ベルク：風土の日本—自然と文化の通感、筑摩書房、1988
- 4) オギュスタン・ベルク：日本の風景・西欧の景観、講談社現代新書、1990
- 5) オギュスタン・ベルク：風土学序説—文化を再び自然に、自然をふたたび文化に、筑摩書房、2002
- 6) オギュスタン・ベルク：風景という知—近代のパラダイムを超えて、世界思想社、2011
- 7) 和辻哲郎：風土—人間学的考察、岩波書店、1935、改版1967
- 8) 篠原修：土木デザイン論、東京大学出版会、2003、p.49
- 9) 中村良夫：山水都市の運命を担う市民社会、「風景とローカルガバナンス」第1章、早稲田大学出版部、2014
- 10) 中村良夫：土木空間の造形、技報堂出版、1967
- 11) 中村良夫：風土自治圏を育む—22世紀へ羽ばたく高原保養都市軽井沢ランドスケープデザインからのメッセージ、ランドスケープデザイン No.105, pp48-55, 2015
- 12) 中村良夫：景観パラダイムの多元性について、土木学会景観・デザイン委員会20周年記念シンポジウム基調講演、2017.12.1京都大学
- 13) 吉村有司：まちづくりにおけるAIの可能性—建築家にとって科学とは何か？、建築雑誌Vol.132, No.1704, pp.36-37, 2017.11
- 14) 石川初：思考としてのランドスケープ—地土学への誘い、LIXIL出版、2018
- 15) 網野善彦：「日本」とは何か、講談社、日本の歴史00, 2000
- 16) 朝井リョウ：何者、新潮社、2013
- 17) 藤本耕平：つくし世代—「新しい若者」の価値観を読む、光文社新書、2015
- 18) 佐々木葉：アウラなき時代の風景意欲、土木学会景観・デザイン研究講演集, No.5, pp240-246, 2009
- 19) 佐々木葉：私の風景の日常性と地域景観認識モデル、土木学会景観・デザイン研究講演集, No.8, pp149-155, 2012
- 20) 山田圭二郎・西研：風景の人間の意味を考える—「なつかしき」を手がかりに、「風景とローカルガバナンス」第6章、早稲田大学出版部、2014